

午後Ⅰ試験

問1

問1では、化学製品製造業の企業におけるDX推進を題材として、DXプロジェクトの特性を理解しているかどうか、プロジェクトを立ち上げる実務能力を習得しているかどうか、について出題した。全体として正答率は高かった。ただ、DXプロジェクトの特性として全社を横断した推進体制が必要となる点については、より一層の理解が求められる。

設問2(1)は、正答率がやや低かった。“予算をもっているから”という解答が散見され、プロジェクトチームの編成と予算執行の権限を混同している受験者がいた。CDO直下にプロジェクトチームを置くことで、部門の制約にとらわれず、プロジェクトに専念できる体制で推進する狙いがあることを理解してほしかった。

設問2(2)は正答率が平均的であったが、現業部門とIT部門が一体となって進めるというDXの特性を理解していない解答が多かった。現業部門の最適化の案の検討が完了しない限り、IT部門のプロジェクトの作業は進められないことを理解してほしかった。

設問3(1)は、正答率がやや低かった。状況を説明する解答にとどまり、提案が遅延リスクを解消する目的であることに触れていない解答が多かった。“DX検討チームはITに慣れていない”や、“プロジェクトの進捗が遅れている”などの解答は、プロジェクトの状況を説明しているだけであり、スキルのあるメンバを投入することでスケジュールの遅延を回避するというリスク対応が目的であることを明確に答えてほしかった。

問2

問2では、プロジェクトチームの開発について出題した。全体として正答率は高かった。顧客から、自社のサービスの提供価値を、継続的かつ迅速に高めていくために長期的な協力を期待されている状況において、市場に提供する価値を顧客と共創しつつ、プロジェクトチームの学習サイクルを回しながら成長させていこうとするプロジェクトマネージャの意図はよく理解されていた。

設問3(1)は、正答率がやや高かった。“重要な”ステークホルダとして、多くの受験者が“消費者”と解答したことは、社会に価値を提供することがプロジェクトの本質的な目的であることをしっかり意識して活動しているプロジェクトマネージャが多いことを示していると思われる。一方で、目の前の一部の“顧客”や“自社の経営層”と解答した受験者は、この機会にプロジェクトの本質的な目的について、見つめ直してほしい。

設問3(3)は、正答率が低かった。相互理解の更なる深化、役割の固定化の解消及び異なる視点からの改善のアイディアの獲得という目的で、サブチーム間で行うことを問うたが、自由なコミュニケーション、タイムリな意見交換、などの解答が散見された。役割の固定化の解消までつなげるには、抜本的な施策が必要である、という視点をもってほしかった。

問3

問3では、SaaSを利用する人材管理システム導入のプロジェクト計画の作成について出題した。全体として正答率は高かった。

設問1(2)は正答率が平均的であったが、カスタマイズの最小化による導入コスト削減・導入期間短縮だけに着目した解答が散見された。SaaSの特長を生かして人材戦略経営を実現するために、プロジェクトマネージャが拡張、改善される標準機能を利用し続けることが重要であると考えた点に着目して解答してほしかった。

設問3(2)は、正答率が低かった。チャットルームのログに含まれる情報を記載するだけで、その必要性に関する説明がない解答が多かった。要件定義作業においては討議結果の根拠を明確にすることが重要であり、プロジェクトマネージャがそのために必要な資料を成果物にしようと考えた点を理解してほしかった。